特集

漢字の歴史を巡る旅
～日本の漢字文化の始まりに迫る!～

撮影／山田和幸（P6） Kishimoto Kaoru（P10） イラスト／すぎやまえみこ

漢字とは文字通り、漢民族の字です。つまり、中国から日本へと伝えられたものです。――と、ここまでの話は多くの方が知っていることでしょう。しかし、漢字が伝わった後、日本でどのように根付いていったかはあまり知られていません。そこで、今回の特集では、〝日本における漢字文化の始まり〟についてQ&A形式で紹介します。

質問にお答えくださるのは、古代史研究の第一人者である国立歴史民俗博物館の平川南館長です。

国立歴史民俗博物館
平川 南 館長

1943年生まれ。宮城県多賀城跡調査研究所に勤務後、国立歴史民俗博物館に移り、現在は館長を務める。日本古代史を専門とし、漆紙文書、墨書土器、木簡などの出土文字資料から古代社会を研究。著書に『古代日本 文字の来た道――古代中国・朝鮮から列島へ』（大修館書店）、『漆紙文書の研究』（吉川弘文館）、『日本の歴史第2巻 日本の原像』（小学館）などがある。

Q1 日本列島の人々は漢字といつ出合ったのでしょうか?

日本人は2000年以上前から漢字に接していた!

もともと、日本には話すための言葉はありましたが、それを書き記すための文字はありませんでした。そんな日本に、中国生まれの漢字が朝鮮半島を経由して入ってきたのは弥生時代の前半ごろ。実態に近い言い方をすれば〝漢字が書かれたさまざまな品物が入ってきた〟という状況です。

紀元前2世紀、当時の中国王朝である前漢が朝鮮半島北部に進出し、そこに地方行政組織を設置しました。中国の歴史書には、これをきっかけに、朝鮮半島の人々を介して日本（倭国）と中国が交流するようになったことが記録されています。中国↔朝鮮半島↔日本という交流が深まる中で、漢字が書かれた銅鏡・鉄剣・貨幣などが日本に入ってきたのです（イラスト1）。

その中で特に有名なものが、福岡県志賀島で発見された金印です。「漢委奴国王」という漢字が刻まれた金印は、紀元後57年に九州北部にあった奴国が後漢の皇帝から与えられたものでした。このような歴史的事実から、今から2000年以上前、すでに日本人（倭国の人）は漢字に接していたことが読み取れます。

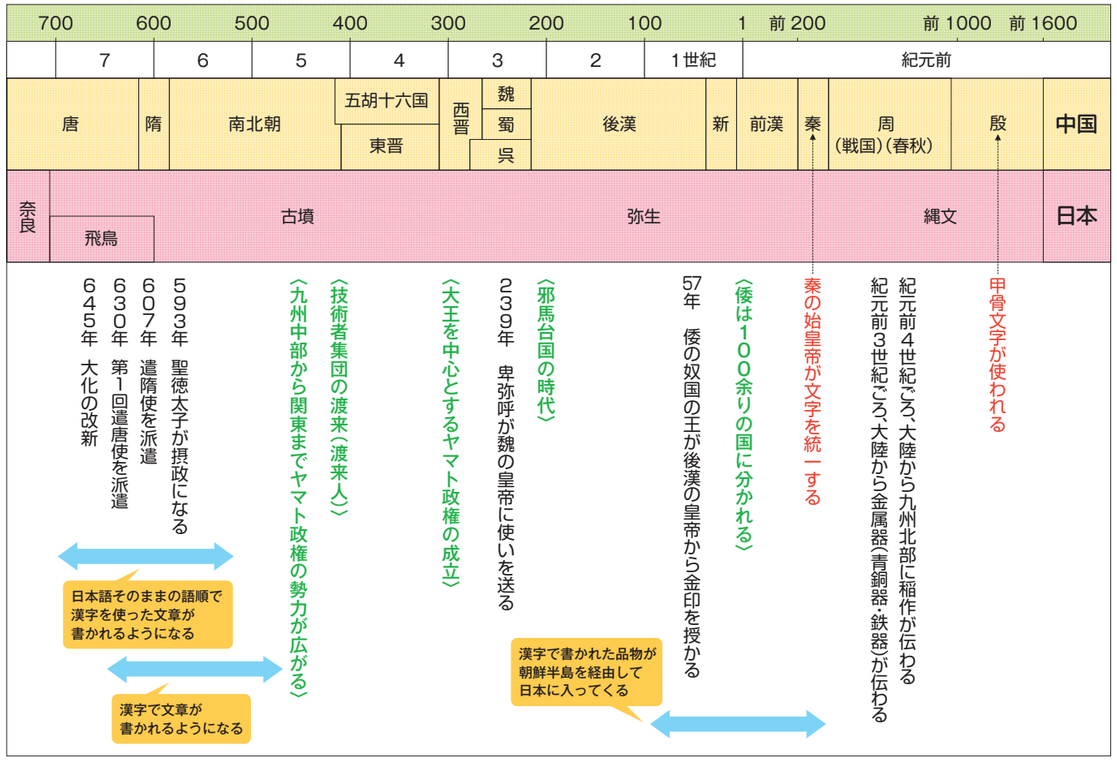
しかし、大陸から漢字が書かれた品物が伝わってきたからといって、すぐに日本人が漢字を読み書きできたわけではありません。古代の日本人が漢字を使った例として現在確認できるものは、2～4世紀のもので、1文字の漢字が刻まれた土器が数点発見されているだけなのです。

たとえば、三重県津市の大城遺跡から出土した土器の破片は2世紀前半のもので、「奉」または「年」などと読める文字が刻まれています（資料1）。また、福岡県糸島市の三雲遺跡から出土した甕には、鏡を意味する「竟」の文字が刻まれています。これは3世紀半ばのものです。

ただし、これらの漢字は、当時の日本人が大陸から入ってきた品物を見て、〝見よう見まね〟で描いたにすぎないと考えられています。この時点では、まだ〝日本における漢字文化の始まり〟とまでは言えませんね。

（資料1）三重県津市大城遺跡出土の刻書土器
津市教育委員会提供

（イラスト1）2000年以上前、漢字が書かれた品物が日本に入ってきた。



Q2 日本人はいつ漢字を使い始めたのでしょうか?

〝日本における漢字文化の始まり〟は5世紀!

日本人が1世紀ごろから漢字に接していたとはいっても、当時の日本で漢字の読み書きができたのは大陸からやってきた人々（渡来人）ぐらいです。中国との外交文書は漢字で書かれていましたので、日本の小国の統治者たちは漢字を読み書きできる渡来人を政権の重要な役職に雇い入れました。3世紀に邪馬台国の女王・卑弥呼が当時の中国の王朝のひとつである魏に使いを送ったころには、漢字の重要性が増しており、外交や交易において日本人が漢字を使いこなすことが求められるようになってきました。

それでは、日本人がいつ漢字を使い始めたかというと、それは5世紀になってからだと考えられています。たとえば、千葉県市原市の稲荷台1号墳から出土した5世紀半ばのものとされる鉄剣には、「王賜」という表記を含む12文字の漢字が記されています（資料2）。これは近畿地方のヤマト政権の王（大王）が地方の豪族に鉄剣を授けたことを意味するもので、短文ではありますが、明らかに文章として成立しています。これが現在のところ確認できる、日本人が書いた最古の文章だと考えられています。

また、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した鉄剣には、115文字の漢字が記されています（資料3）。この鉄剣の裏には「獲加多支鹵大王」という人物名が書かれていますが、この名前は熊本県玉名郡和水町の江田船山古

墳から出土した鉄刀でも確認されています。大王が授けたと思われる剣や刀が関東や九州で発見されたという事実は、ヤマト政権の勢力がそれだけ広範囲に及んでいたことを示しています。ヤマト政権は当時の中国の王朝である宋から、日本を代表する政権であると認められていました。中国から認められたことで自らの権威を示し、地方の豪族たちを従えていきます。その権威の証しを漢字で剣や刀に刻んだのです。

このように、外交関係を結ぶ上でも、国内統治を進める上でも、漢字は重要な役割を果たしました。5世紀こそ、〝日本における漢字文化の始まり〟と言えるでしょう。

（資料2）千葉県市原市稲荷台1号墳出土の鉄剣
市原市教育委員会提供、国立歴史民俗博物館撮影

（資料3）埼玉県行田市稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣
文化庁所有、埼玉県立さきたま史跡の博物館提供

Q3 古代では、漢字を書けるとどんないいことがあったのでしょうか？

漢字が書けると収入が3倍に!?

古代の日本で漢字を書ける人は高収入を得ることができました。8世紀ごろの話ですが、土木作業の収入が1日あたり9～10文だった時代に、写経生の収入は1日あたり7枚の写経でなんと35文でした。写経生は1日に297字（1行17文字×25行×7枚）を写すのです（イラスト2）。高収入ですから、有力者の子弟たちは写経生になるために、必死に漢字を練習していたことでしょう。

実は、古代の日本人が漢字の練習をした証拠が正倉院に残っています。正倉院には今から1200～1300年前に書かれた肉筆の資料が1万数千点ありますが、その中に写経生の採用試験用紙が見つかっているのです。それらを見ると、試験では数行の写経をさせて合否を判定していたようです。当時、写経は国家主導の事業ですから、写経生の採用試験は今でいう国家試験にあたるものだったと言えそうです。

興味深いことに、写経生にはペナルティーがあったことも分かっています。誤字は5文字につき1文、脱字は1文字につき1文が収入から引かれました。脱行してしまうと、なんと20文も引かれる決まりもありました。1日の収入の半分以上が漢字のミスによって一瞬で消えてしまうのです！

誤字、脱字、脱行にペナルティーを与えていたのは、古代の人々がそれだけミスをしたからでしょう。写経生は漢字を書き写すことはできても、漢字の意味を理解できていなかったため、間違いが起きやすかったようです。つまり、現在と異なり、当時は漢字が書けることと漢字で書かれた文章を理解することはイコールではなかったのです。

（イラスト2）高収入を得られた写経生。ただし、漢字を間違えるとお給料が減らされた!!

Q4 漢字は日本でいつ広がり始めたのでしょうか？

〝日本における漢字文化の確立〟は7世紀！

5、6世紀ごろ、漢字を読み書きできたのはわずかな人だけでした。当時の文章は基本的に中国語の文法が使われ、日本人がその意味を理解するためには、語順を入れ替えて読む必要がありました。日本語の音通りに漢字が書かれたのは、先に述べたような「獲加多支鹵大王」といった固有名詞に限定されていました。

7世紀になると、日本語そのままの語順で漢字を使った文章が書かれるようになりました。代表的なものは、群馬県高崎市にある681年に作られたとみられる山ノ上碑（資料4）と滋賀県野洲市の西河原森ノ内遺跡の木簡（資料5）です。これらは日本語の文法を使っているため、始めの漢字から順番通りに読み進めていくことができます。

（資料4）山ノ上碑　群馬県高崎市
「辛巳歳」銘＝六八一年

〔銘文〕
辛巳歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒売刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也　放光寺僧

〔訓読〕
辛巳の歳、集月三日記す。
佐野の三家と定め賜える健守の命の孫
黒売刀自、此れ
新川臣の児斯多々弥足尼の孫大児臣と
娶いて生める児、
長利の僧、母の為めに記し定める文なり。放光寺僧

山ノ上碑は亡き母にささげるもので、漢字が政治以外の領域でも使われるようになったことを示しています。このように、7世紀は日本人が本当の意味で漢字を自分たちのものにしていった時代であり、〝日本における漢字文化の確立〟において非常に重要な時期だったと言えるでしょう。

それでは、なぜ7世紀になって漢字の使用が全国に広がったのでしょうか。それは国家の成立が大きく関係しています。日本では6世紀の終わりごろに古代国家の体制が徐々に整えられていきましたが、その過程でヤマト政権は、全国各地の役人に対して文書で命令を発しました。そして、地方の役人も政府への報告を文書で行うようになったのです。このように政府と地方の役人が活発に文書を交わすようになる中で、一般の人々にも広く漢字の存在が知られるようになっていきました。

（資料5）滋賀県野洲市西河原森ノ内遺跡2号木簡
野洲市教育委員会提供

棕□□之我□□稲者□□得故我者及来之故是汝トア
自舟人率而可行也　其稲在処者衣知評平留五十戸旦波博士家

これも日本語の語順で、漢字を使って書かれた文章。「棕□」が「衣知評」の「平留五十戸」から稲を持ち帰ろうとしたが、馬がなくて持ち帰れなかったため、「卜部」に「舟人」を率いて稲を運ぶように指示したもの。

Q5 どうして古代の漢字文化の様子が分かるのですか？

全国各地で出土する木簡や土器などに、日本の漢字の歴史は刻まれている！

日本の文字文化の研究は、第二次世界大戦後の考古学の発展により進みました。全国各地で新たな資料が次々と出土したのです。

木簡や文字の記された土器や瓦の発見によって、従来の学説が一変することもあります。たとえば、『古事記』や『日本書紀』など限られた文献資料に頼っていた従来の文字研究において、『万葉集』は「あ」は「阿」もしくは「安」の字を使うと決まっていました。ところが、千葉県で見つかった土器や瓦では「赤浜」という地名を「赤加皮真」、「阿弥陀寺」を「赤弥田寺」と表記していたのです。これは漢字の意味を問わず音のみを用いた古代日本の漢字の使い方の典型例です。

日本の文字研究のもうひとつの鍵は、朝鮮半島から出土する資料です。ここ10年の間に韓国で新しい資料が相次いで発見され、新たな研究成果を生んでいます。漢字の研究は、今後も新たに発見される資料により、さまざまなことが分かってくるでしょう。

このように漢字の研究は中国・朝鮮半島・日本をつなぐダイナミックな分野であり、歴史のロマンを感じることができる学問なのです。

漢字を知るには欠かせない

中国における漢字の起源とは？

漢字文化の源流である中国。その中国ではどのように漢字が生まれ、広がりを見せたのでしょうか。中国文化史研究の第一人者である阿辻哲次教授に伺いました。

京都大学大学院
阿辻 哲次 教授

1951年生まれ。京都大学大学院教授。当協会評議員。専門は漢字を中心とした中国文化史。2010年には文化審議会国語専門部会委員として、常用漢字表の見直しにも携わる。著書に『漢字文化の源流』（丸善）、『漢字のはなし』（岩波書店）などがある。

漢字を作った伝説の人物

朝鮮半島で現在も使用されているハングルなど、比較的新しい時代に作られた文字は制作者や制作年代がはっきりしています。それに対して、漢字をはじめとする長い歴史を持つ文字の起源を解き明かすことは容易ではありません。実のところ、漢字がいつどこで、どのようにして生まれたのかは、まだはっきりとは分かっていません。

古くからの伝説によれば、竜のような顔、4つの目を持つとされる蒼頡（そうけつ）という人物が漢字を発明したと言われています（資料6）。蒼頡は鳥や動物の足跡の特徴によって、その場にいない鳥や動物の姿を思い浮かべることができることに気づき、それをヒントに漢字を発明したと伝えられています。

（資料6）『三才図会』の蒼頡像。阿辻 哲次著『図説 漢字の歴史』大修館書店より引用。

宗教的な道具としての漢字

意味が理解できる最古の漢字は、紀元前1300年～紀元前1030年ごろに使われていた甲骨文字です（資料7）。古代中国の王はカメの甲羅（こうら）やウシの骨の裏側に開けたくぼみに熱を加え、表側のひび割れの形によって、吉凶、豊作、天候などを占いました。甲骨文字は、神様のお告げの結果を記録しておくために、その甲羅や骨に刻まれたものです。つまり、漢字は宗教的な道具として使われ始めたのです。現在の研究では、この甲骨文字が漢字の元になっていると考えられています。

漢字が人と人とのコミュニケーション手段として使われるようになったのは、紀元前770年以降の春秋戦国時代になってからです。群雄割拠の覇権争いの中、人々に命令を伝えて国を統治していくために、漢字が重要な役割を果たしていきました。

（資料7）阿辻教授が所有されている甲骨文字の復元品。

これからも紡がれる漢字の歴史

ところで、漢字の字数がどれくらいあるかご存知でしょうか。1716年に中国でまとめられた『康熙（こうき）字典』には、約4万7千字が収録されています。日本の大修館書店が1955年に出版した『大漢和辞典』には、約5万字の漢字が掲載されました。その後、1990年代の中国でまとめられた『中華字海』には、約8万字が収められています。

歴史上のどこかの時点で使われていた漢字が記録に残り、長い年月を経て8万という数になりました。8万字という数は、まさに漢字文化が積み重ねられてきたことの証しと言えるでしょう。しかも、中国では今後も新しい漢字が作られる可能性があります。漢字はこれからも歴史を紡ぎ続けるのです。

漢字に目を向けることは、その国の歴史・社会・文化を知ること

今回の特集では、日本と中国の漢字文化の始まりを駆け足で見てきました。

中国では占いという宗教的要素の中から漢字が生まれ、後に政治の世界で重要な役割を担いました。それに対し、日本では、まず外交や国内統治において重要な役割を果たし、その後、人々の生活の中に広がっていきました。このように、漢字の歴史を振り返ることは、国語や言葉の世界に留まらず、その国の歴史・社会・文化を知ることにつながっているのです。

漢検 受検者の声

漢字で深まる家族の絆（きずな）

漢字は年齢に関係なく学べる身近な学習対象であるため、
３歳から101歳という幅広い年齢層の方が漢検に挑戦し、
近年では家族全員で漢検に挑戦するご家庭も増えています。
本コーナーでは、平成22年度「日本漢字能力検定 成績優秀者」表彰 特別賞 家族の部※を
受賞されたご家族に漢検受検体験談を伺います。

※財団法人 日本漢字能力検定協会は「日本漢字能力検定」において特に優秀な成績を収めた個人・団体を表彰する制度を設けています。

妻鳥（めんどり） さんご一家 （愛媛県）

父・祐介さん	2級合格
母・綾子さん	準2級合格
長男・紘大（こうだい）くん	準2級合格（中学校2年生時）
長女・友架さん	5級合格（小学校6年生時）
次男・純大（じゅんだい）くん	9級合格（小学校2年生時）

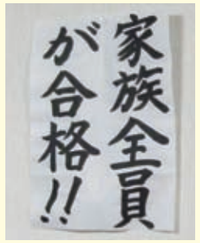
「家族全員が合格！」をスローガンに

父・祐介さん　テレビ番組を見て漢検に興味を持った私が、嫌がる妻を説得。「家族全員が合格！」のスローガンのもと、5人で漢検に挑戦することを決めました。

受検勉強を始めるにあたり、少しでも構わないので「毎日続けること」を子どもたちと約束しました。子どもは集中力が途切れがちなので、市販の問題集に加え、ニンテンドーDSを活用したり、家族で過去問題の点数を競ったり、変化に富んだ学習方法を心掛けました。特に四字熟語については、まず言葉の成り立ちを調べ、次に例文を作ることで、単なる丸暗記で終わらないよう工夫して取り組むアドバイスをしました。

軽々しく「家族全員が合格！」をスローガンに掲げてしまいましたが、焦っていたのは実は私たち親の方。妻は深夜まで協会発行の『漢検過去問題集』とにらめっこ、私は毎日職場の昼休みに過去問題を解き続けました。私は直前まで合格目安の点に届かず、子どもたちから「父さん、しっかりしてよ！」という苦しいプレッシャーを受けることもありましたが、努力のかいあって、かろうじて合格でき、親としての威厳を保てたことに内心ホッとしています（笑）。

受検級は違いますが、家族全員が「漢字」という共通のフィールドで競い合ったことで、家族の雰囲気は大きく変わりました。親子の会話が増え、次いで子どもたちが自発的に問題を出し合う光景が多く見られるようになりました。次回は、祖父母も挑戦の予定です。



リビングには母・綾子さんが書いたスローガンが飾られている。

茶木（ちゃき） さんご一家 （東京都）

父・友弘さん	準2級合格
母・淳子さん	2級合格
長女・佐和子さん	5級合格（中学校1年生時）
長男・修平くん	6級合格（小学校6年生時）
次男・裕輔くん	9級合格（小学校3年生時）

「やりなさい」から「一緒にやろう」へ

母・淳子さん　最初は「もっと漢字に親しんでほしい」という思いから、子どもたちに漢検を勧めました。一方、親である私たちもパソコンに頼ることで手書きの機会が減っていましたので、今一度漢字を復習しようと、子どもたちと一緒に漢検に挑戦することを決めました。普段、子どもたちに勉強を「やりなさい」と言うことはありますが、「一緒にやろう」と言えたのは今回が初めてです。結果的に、家族全員で合格の喜びや達成感を分かち合うことができ、みんなで挑戦して本当に良かったと思っています。

子どもたちにとって漢字学習は決して簡単なことではありません。普段から意識していないと、ノートの字が雑になったり、漢字の細かいところをあいまいに書いたりしがちです。そこで我が家では、リビングのいつでも手に取れる場所に辞書を置き、分からない漢字に出合ったとき、すぐに調べる習慣をつけるようにしました。子ども部屋に辞書を置くと、活用しているのかどうか、親には分からないからです。しばらくすると、次男がパラパラと辞書をめくるようになり、「鸚鵡（おうむ）」などの難しい漢字を書くようになりました。遊び感覚なのでしょうが、漢字に親しみを持ってくれたようです。漢字は一字一字に意味があり、日本語を豊かにしてくれます。子どもたちには、漢字に親しみながら、読み書きだけでなく意味をきちんと知ることで、表現の幅、思考の幅を広げていってほしいと願っています。

家族そろっての勉強タイムはみんな真剣。思い思いの方法で勉強に取り組む。

漢字学習を通して感じた子どもたちの成長

前沢 さんご一家 （栃木県）

父・典明さん	3級合格
母・晃子さん	準2級合格
長女・菜緒さん	7級合格（小学校5年生時）
長男・悠介くん	10級合格（小学校2年生時）
次女・珠実さん	10級合格（小学校2年生時）

満点賞受賞

母・晃子さん　昨年夏、漢検の家族受検表彰制度を知り、子どもたちと一緒に挑戦することを決めました。子ども3人と私は机を並べて協会発行の『漢検 過去問題集』に取り組み、夫は片道2時間の通勤電車の中で、ニンテンドーDSを使って勉強していました。また、家族で外出するときには、目にした看板の漢字を題材に、読み方、書き順、部首などをクイズとして出し合い、楽しみながら漢字に触れる機会を増やしました。

検定当日は、小学校2年生の双子がしっかり受検できているのか心配で、親の方がそわそわしていました。しかし、ふたを開けてみれば、次女は満点合格！「できた、できた」と本人は言っていましたが、まさか満点だとは思っていなかったので、とても驚きました。

家族で同じ目標に向かって勉強したことで、子どもたちの成長を感じることもできました。たとえば、これまで子どもたちと話すときには、あえて簡単な言葉を選んでいましたが、最近では長女との会話が大人の言葉で成り立つようになってきました。漢検を通して語彙力が高まってきたのだと思います。また、あまり本を読まなかった長男が、本を手に取るようにもなりました。

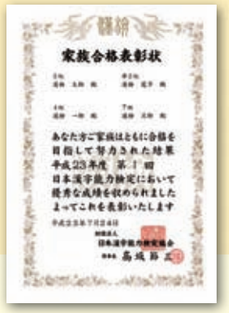
漢検に挑戦して最も良かったことは、何より家族で同じ話題、同じ時間、同じ感動を共有できたことです。合格によって得られた達成感は他ではなかなか味わえないものでした。次回の検定ではさらに1つ上の級を目指したいと思っています。

ニンテンドーDSで勉強する父・典明さんと、それをのぞき込む子どもたち。

※ ニンテンドーDSは任天堂の登録商標です。

家族受検表彰制度のご案内

家族受検表彰制度とは、家族で受検して合格された場合に、個別の合格証書に加えて、合格者全員の名前が入った「家族合格表彰状」を授与する制度です。



※イメージ

申請資格

- 申請者全員が家族・親族であること。
  ※必ずしも同居のご家族である必要はありません。
- 申請者全員が同年度同回において漢検1～10級に合格していること。
- 申請者数が2名以上6名以下であること。

家族合格表彰状受け取りまでの流れ

受検する ……検定日
↓
合格証書を受け取る ……約40日後（漢検CBTは約10日後）
↓
家族合格表彰の申請書を送る……合格証書受け取りから約30日以内
↓
家族合格表彰状が届く ……申請締切日から約2週間後

申請方法

個人受検（漢検CBTを含む）の方は、合格証書とともにお届けする申請書に必要事項をご記入の上、郵送もしくはFAXにて協会本部へ送付してください。団体受検（漢検CBTを含む）の方は、申込受付団体のご担当者様を通じてご申請ください。申請書および表彰状は団体のご担当者様へお届けします。

頭の体操！ 漢字パズル

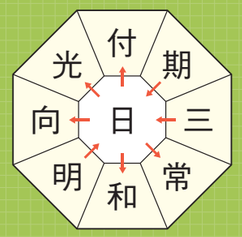
家族みんなで楽しい漢字パズルに取り組んでみましょう。
今回、挑戦していただくのはこちらです。

漢字ダイヤモンド

出題：スカイネットコーポレーション

解答は ▶ 23ページに掲載

例題



周りの漢字は、二字熟語の頭にくるものと、後ろにくるものがあります。読み方にも注目してください。難しい熟語も入っています。初めて出合った熟語は国語辞典で意味を調べてみましょう。

初級

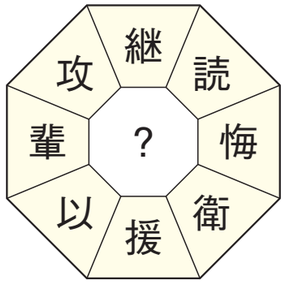
周りの8つの漢字すべてと二字熟語を作ることができる漢字一文字を、八角形の真ん中に入れてください。

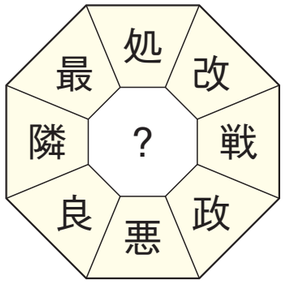
ヒント！
小学校５年生で習う漢字です。

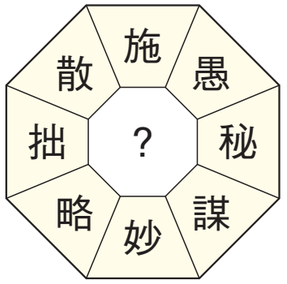
真ん中に入る漢字

中級

初級よりも少しレベルアップ。周りの漢字と熟語を作ることができる漢字一文字を見つけたら、その漢字を組み合わせてできる三字熟語を答えてください。





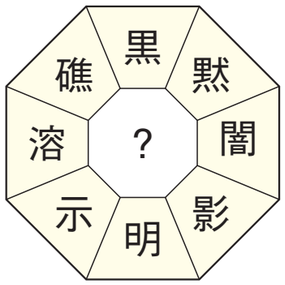


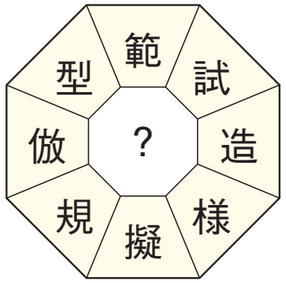
ヒント！
三字熟語のヒントは、「これを考えておけば何かあっても安心です」。

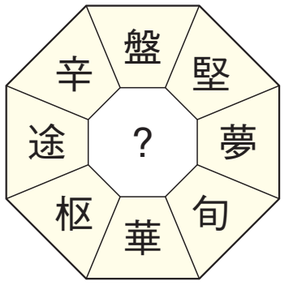
完成する三字熟語

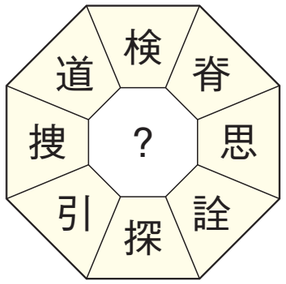
上級

上級に挑戦！ 周りの漢字と熟語を作ることができる漢字一文字を見つけたら、その漢字を組み合わせてできる四字熟語を答えてください。









ヒント！
傲慢（ごうまん）で物忘れのひどい政治家に対して、ある人が忠告したという唐の時代の故事に由来する四字熟語です。（参考：『故事成語　名言大辞典』大修館書店）

完成する四字熟語

漢検トピックス

財団法人 日本漢字能力検定協会の活動について紹介します。

イベント案内

今年も開催します！2011年「今年の漢字®」

当協会は毎年、その年の世相を表す漢字一字を全国から募集し、最も応募数の多い漢字を「今年の漢字」として、12月中旬に京都・清水寺にて発表しています。2010年の第1位は「暑」でした。2011年は11月初旬から募集を開始し、12月12日（月）に発表します。応募方法などの詳細は、10月中旬に漢検ホームページにて発表します。

検定情報

平成24年度から漢検審査基準が変わります

当協会では、常用漢字表の改定に伴い、平成24年度第1回検定より日本漢字能力検定の審査基準を変更します。新しい審査基準は漢検ホームページに掲載していますのでご確認ください。

※平成23年度第2回および第3回検定（漢検CBTは平成24年3月末日まで）は現行の審査基準に基づいて実施します。

イベント案内

国民文化祭にて協賛イベントを開催！

今秋、京都府で行われる第26回国民文化祭に合わせ、当協会では「遊ぶ！学ぶ！見つける！わくわく漢字フェスティバル」を開催します。親子を対象にした漢字教室や、「今年の漢字」16年展を中心としたイベントを左記の通り実施する他、7・8月に募集した「漢字のある風景」フォトコンテストの入賞作品の発表等を行います。

国民文化祭 PR 隊長まゆまろ

参加型イベント

日程
9月23日(祝)、24日(土)

場所
キャンパスプラザ京都（京都市）

被災地支援

東日本大震災における被災地支援のご報告

この度の東日本大震災により被災されたみなさまに心からお見舞い申し上げます。当協会は、岩手・宮城・福島の東北3県の教育委員会、新聞社などへ寄付金・義援金として2100万円を寄贈いたしました。今後も文部科学省や被災地の各教育委員会と連携を図り、更なる支援を実施してまいります。

イベント報告

「漢字の力」シンポジウムを開催しました

6月25日（土）、名古屋市で開催した「漢字の力」シンポジウム（漢検・中日新聞社共催）に約500名が参加。第1部は作家の椎名誠氏が「本の力、本の夢」と題して基調講演を行いました。第2部は京都大学の阿辻哲次教授、前名古屋商工会議所会頭の岡田邦彦氏、書家の矢野きよ実氏らがパネルディスカッションを行い、次代に漢字の魅力を伝え、漢字活用力を養う大切さについて語り合いました。

研究支援

平成23年度「漢検漢字文化研究奨励賞」論文募集中

「漢検漢字文化研究奨励賞」は、漢字文化に関わる優れた学術的研究・調査等に対して、その功績をたたえ社会全体に広く公表していく制度です。現在、若手研究者の優れた学術的研究・調査を募集しています。最優秀賞は100万円。昨年度は優秀賞2名、佳作3名が受賞しました。

応募締切　10月31日(月)　※消印有効

学習支援

「漢検生涯学習ネットワーク」活動開始！

1級・準1級合格者の会員組織「漢検生涯学習ネットワーク」が平成23年度より活動を開始しました。会員証の発行、会員通信の送付の他、6月26日（日）には、東京都で第1回研修会を開催しました。白百合女子大学の山本真吾教授による「漢字研究」に関する講演や会員2名による研究発表を行い、約120名が熱心に聴講しました。

学習支援

平成24年度「漢字同好会」新規登録募集中

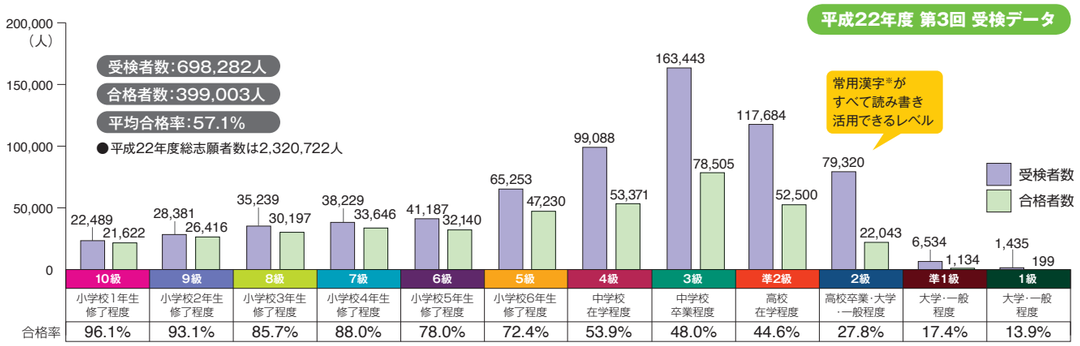
「漢字同好会」活動支援制度は、日本語や漢字への興味関心を高め、漢字学習の振興に寄与する全国の漢字同好会を支援する制度です。現在7つの登録団体があります。登録団体は、活動費の一部助成、活動の告知・広報の支援、漢検情報誌の提供などが受けられます。

平成24年度新規登録団体

応募締切　12月16日(金)　※協会必着

イベント情報、漢検漢字文化研究奨励賞、漢字同好会活動支援制度などの詳細は、漢検ホームページ（http://www.kanken.or.jp/）をご覧ください。

平成22年度 第3回 受検データ



※ 昭和56年10月1日内閣訓令・告示

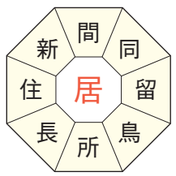
解答

頭の体操！漢字パズル

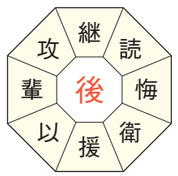
漢字ダイヤモンド

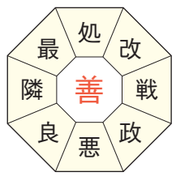
問題は●20、21ページに掲載

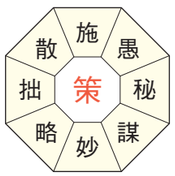
初級



中級



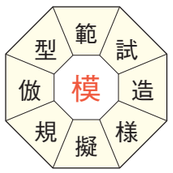


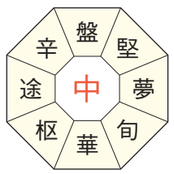


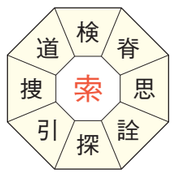
善 後 策

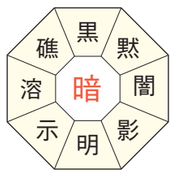
意味　うまくあと始末をつけるための方策
（参考：『漢検 漢字辞典』）

上級









暗 中 模 索

意味　手掛かりがないままに、あれこれとやってみること（参考：『漢検 四字熟語辞典』）

由来：唐の時代、人の名前を忘れてしまう政治家・許敬宗に対し、ある人が「前代の有名人に会うような気持ちで接すれば、はじめは暗い中を手探りするようでも（＝暗中模索）、自然に相手の名前が覚えられますよ」と教えたという話。（参考：『故事成語　名言大辞典』大修館書店）

『漢検ジャーナル』への感想募集中！

『漢検ジャーナル』をご覧いただき、誠にありがとうございます。当協会では『漢検ジャーナル』へのご意見・ご感想を受け付けています。今後の制作に役立ててまいりますので、漢検ホームページの『漢検ジャーナル』感想受付フォームより、みなさまのお声をお寄せください。